

＜祈りのために＞

主は御手をもってわたしをとらえ、この民の行く道を行かないように戒めて言われた。

あなたたちはこの民が同盟と呼ぶものを何一つ同盟と呼んではならない。

彼らが恐れるものを、恐れてはならない。その前におののいてはならない。

万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏るべき方は主。

御前におののくべき方は主。

(イザヤ書8章11節～13節)

北朝鮮は8月29日午前6時頃、弾道ミサイル1発を発射しました。ミサイルは中距離弾道ミサイルとみられ、北海道の襟裳岬上空を通過し、太平洋上に落下しました。今年に入って13回目のミサイル発射、との報道がありました。

これに対する安倍総理大臣のコメントは「我が国を飛び越えるミサイル発射という暴挙は、これまでにない深刻かつ重大な脅威であり、(中略)断固たる抗議を北朝鮮に対して行いました。(中略)国際社会と連携し、北朝鮮に対するさらなる圧力の強化を日本は強く国連の場において求めて参ります。強固な日米同盟のもといかなる状況にも対応できるよう、緊張感をもって国民の安全・安心の確保に万全を期して参ります」というものです。

同盟の相手国の大統領は「全ての選択肢がテーブルの上にある」との声明を発表しています。この「全て」とは言うまでもなく「武力攻撃」を含むという意味です。

しかし、「圧力(制裁を含む)の強化」や「全ての選択肢(武力攻撃含む)を取る」という脅しで北朝鮮との関係は改善されるのでしょうか。中国が対話の重要性を指摘し、米国も対話の用意があることを表明していますが、日本政府はどうでしょう。関係改善の意思があるなら代償を払っても行動すると思いますが、ここ10年ばかり相互の対話の報道が全くないので、恐らく日本政府として現在は関係改善の意思はないのでしょうか。安倍総理の発言は勇ましいですが、「関係改善を図ります」とは一言も発言していないことから明らかです。

万葉の時代から深く長い交流の歴史のある隣国との関係を良好にする意思がないとすれば異常ですし、安全保障上も危険なことです。政府には何らかの理由があるのでしょうか。

しかし、私たちキリスト者はイザヤ書が告げる「あなたたちが畏るべき方は主。御前におののくべき方は主。」を前にし、主なる神に私たちのなすべきことを祈り求めなければなりません。主イエスは「隣人を愛しなさい」とも「敵を愛しなさい」とも言われています。困難とも思える人間関係を、そして困難とも思える隣国との関係を修復することが私たちに与えられた務めではないかと思う次第です。そのことによって「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」という主イエスの言葉が現実になるよう共に祈りたいと思います。 澤田磐雄(西宮中央教会長老、近畿中会教会と国家に関する委員会委員)

<ヤスクニ問題とわたし>

真理を求めて彷徨っていた自分

田中伊作（北田辺教会牧師）

私は昔「右翼かぶれ」だった。右翼ではない。お恥ずかしい事だが「右翼かぶれ」である。20歳くらいの時から、私は「自分は何者なのか」を問い続け「心の拠り所」を求め彷徨っていた。日教組の組合員で高校の教師をしていた私の「母」に対する反発もあって、私は「国家」に「拠り所」を求めるようになった。丁度、90代半ばで小林よしのりの「戦争論」が大流行していた時代だ。私も買って読んで、かなりハマっていた。まだ洗礼を受ける前の話だ。

当時思っていたことは、今の「ネトウヨ」が言っている事と大して変わらない。「さっさと憲法を改正して国軍を持ち、戦後植え付けられた『自虐史観』から脱却し、日本の国家と歴史に誇りを持たなくてはならない」とか何とか言っていたと思う。情けない話だが「自分」に自信が持てなかった時、私は「国家」という「権威」に縋り付き、そこで自分が「一人前」になったような気がしていたのだ。

しかし、結果はどうだったか。私は何一つ変わらなかった。悩みも苦しみも何も変わらない。現実は何一つ変わっていない。当たり前の話だ。弱く情けない「自分」と向き合う事をしていないのだから。「国家」を声高に叫んでも、自分は救われない。この現実は何よりも私を苦しめた。

特に私が信じられなかったのは「靖国」の物語だ。「右寄り」な人間たちは必ず最後に同じ話をする。「靖国神社に行けば、亡くなった先祖たちに会えるのだ。彼らのお陰で私たちは平和な時代に生きている。彼らは靖国にいて、君たちを見守っていてくれるのだ」と……。これがどうも信じられなかった。「それは嘘だ。あそこには誰もいないよ。」と冷めた気持ちで聞いたのだ。祖父や叔父はキリスト者であるし、後は唯物論者で占められていた家庭で育った私にとって、「靖国物語」は心に響かなかった。「右翼」ではなく「右翼かぶれ」で終わったのは、これが原因だろう。

これは極めて霊的な問題であり、信仰的問題である。もし「靖国物語」を心から受け入れていれば、私は本物の「神道主義者」になっていたであろうし、教会にも来なかった。牧師になることもなかったであろう。霊的な事柄にウソをつく事が出来ない人間は、「ウソ」に身を委ねることはできない。しかし、そこを胡麻化して信じている「フリ」をしている者もいる。最後に問われるのは、結局自分自身なのである。

私の場合は教会員の家族がおり、牧師の説教で「救い主がキリストである」という説教を聴いた。それは真実の説教であり、まさに「御言」であった。私自身の弱さと愚かさをこれでもかという程に抉り出し、確かな「救い」がここにある事を突き付けられたのだ。これが私の求めていたものだった。「ヤスクニ問題」とは自分自身の「弱さ」の問題であり、真実とは「何か」が問われる問題である。

教会の説教が「キリストのリアリティ」をキチンと伝えているか。説教者がこの時代にあつて、とくに試練にあつていることは間違いないだろう。

<良書紹介>

『知ってはいけない隠された日本支配の構造』 矢部宏治著 講談社、2017年

『日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか』、『日本はなぜ、「戦争ができる国」になったのか』(以上、集英社インターナショナル)の著者による、この八月に出版された最新作である。本書はこれら、また著者がこれまで編集などでも関わったものすべての粋と言えるであろう。全260頁、やや厚めの新書である。この出版社の新刊案内では、「なぜ日本は米国の意向を拒否できないのか?この国を動かす『本当のルール』とは?『戦後史の闇』をわかりやすく説き明かす」と紹介されている。『知ってはいけない』という題には、知らないでいて済ませたいことという含みがある。しかし、それではもう済ませることが出来ない日本、世界になってきている。先ず、知らなければならないのではないかという著者の問いかけが込められている題である。

「戦後日本」には「ウラの掟」が数多く存在し、社会全体の構造を大きく歪めてしまっている。「そういう掟のほとんどは、じつは日米両政府のあいだではなく、米軍と日本のエリート官僚のあいだで直接結ばれた、占領期以来の軍事上の密約を起源としている」と、公文書による裏付けを示しつつその代表的な九つについて、九つの章により取り上げられている。その全体像を「高校生にもわかるように、また外国の人にもわかるように」示すという企画の書である。このためにも各章のまとめが、扉ページの裏に先ず四コマ漫画で掲載されている。これを先ず九章分通して読むだけでも有意義と思われるが、それから内容の理解を深めて行くことが出来るようになっている。

各章の題は次の通りである。第一章、「日本の空は、すべて米軍に支配されている」、第二章、「日本の国土は、すべて米軍の治外法権下にある」、第三章、「日本に国境はない」、第四章、「国のトップは『米軍+官僚』である」、第五章、「国家は密約と裏マニュアルで運営する」、第六章、「政府は憲法にしばられない」。第七章、「重要な文書は、最初すべて英語で作成する」、第八章、「自衛隊は米軍の指揮のもとで戦う」、第九章、「アメリカは『国』でなく『国連』である。この一つひとつはすべて切り離しがたく密接に関わり合っているのである。

あり得ない、妄想だと思われる方もあるかも知れない。それで、是非、本書をお読みになって頂きたいのであるが、ここに記されていることは、観光地でない沖縄に行き、例えば辺野古で米軍新基地建設が強行されている現場に行ったならば、事実なのだと認めざるを得なくされることである。ぜひそのような機会を得て頂きたいとお勧めするが、もはや沖縄に行くまでもなく知らねばならなくされていることでもある。九月初めには、あのオスプレイが大分空港に緊急で着陸し、しばらく我が物顔で居座っていたことがあった。これについては、沖縄でなくても報道されていた。あの認め難いような事実を先ず認め、それが何を意味しているのか、よく考えて見なければならない。このような考察のためにも本書は助けである。

篠塚予奈(東京告白教会牧師、大会靖国神社問題特別委員会書記)

〈ヤスクニ・ニュース〉

小池知事 朝鮮人追悼文見送り「虐殺犠牲者慰霊」

東京都の小池百合子知事が、関東大震災時に虐殺された朝鮮人犠牲者を慰霊する9月1日(1923年9月1日、震災時に「朝鮮人が暴動を起こした」「井戸に毒を入れた」などのデマによって虐殺された多数の在日朝鮮人の犠牲者を追悼する日)から94年。知事は追悼文送付を今年からやめることを決めたようだ、都側は「都民の問題提起で数年前から検討していた」と説明。小池知事の独断ではないことを明らかにしたが、虐殺に関する歴史認識を変えたとも言われかねない決定に、「知事も都も説明不足」との指摘が上がっている。式典は日本と韓国・北朝鮮の友好を深めることを目指す「日朝協会」などの市民団体による実行委員会が主催。9月1日に都慰霊協会主催の「大法要」と同じ都立横網町公園(墨田区)の別の場所で催されている。石原慎太郎知事時代から毎年、追悼文を送り、昨年は小池知事も「多くの在日朝鮮人の方々が、言われのない被害を受け、犠牲になられたという事件は、わが国の歴史の中でも稀(まれ)に見る、誠に痛ましい出来事」などと記したが、今回は、「大法要で犠牲となった全ての方々への追悼を行っていききたいという意味から、追悼文を出すことは控えさせてもらった」と述べている。(毎日新聞9月1日)

北朝鮮制裁と人道支援

日米韓首脳は、国際社会に北朝鮮への制裁決議の完全な履行を求め、その効果を見極めていくことで一致した中で、韓国政府は、国際機関を通じて北朝鮮に9億円規模の人道支援を行うことを、21日午前、会議で正式に決めた。規模は800万ドル(9億円)に相当し、ユニセフ(国連児童基金)やWFP(世界食糧計画)を通じて、栄養失調の子どもや妊婦に医薬品や栄養食を現物で支援するとしている。韓国の趙明均統一相は、「政治状況と人道支援は別」という立場を強調した。支援を行う時期については、「南北関係の状況などを総合的に考慮する」として、21日に決まらず、今後調整するとしている。(日本テレビ9月21日)

政府・与党の党利党略の解散に抗議しよう(「キリスト者平和ネット」に送られた緊急声明・概略)

この度の安倍政権・与党による臨時国会冒頭解散は、究極の党利党略であり国家の私物化です。政府の共謀罪法案の審議を委員会討議・採決を飛び越え、「中間報告」という禁じ手で閉会した理由は、森友・加計疑惑隠し、稲田防衛相らの責任追及のがれです。野党が憲法53条に基づいて臨時国会の召集を要求しても、憲法の精神を踏みにじって臨時国会召集要求に応えず、ようやく開かれる臨時国会でも、一切の審議を拒否したまま冒頭解散をするなど、前代未聞の暴挙です。世論の批判の前に、繰り返し「丁寧に説明する」と言い続けたが、朝鮮半島の危機を利用して国会を解散し、総選挙に持ち込むのです。今回の総選挙で与党は改憲を争点にしています。5月3日、安倍首相は自ら改憲を主張し、憲法第9条に自衛隊の存在を書き込むと述べました。この9条改憲は、集団的自衛権行使を容認した「戦争法」(安保法制)の下で、自衛隊が海外で戦争することを合憲化するものです。…以下略…(9月22日戦争させない・9条壊すな!総がかり行動実行委員会)

〈編集部から〉

★ 鎌田雅丈牧師(宝塚布教会牧師、近畿中会・教会と国家に関する委員会書記)が、9月22日(金)午前8時5分、脳内出血のため逝去された(54歳)ことは、キリストの戦友を失い非常に残念です。奥様とご親族と教会に、主イエスの平安を祈ります。

★ 「ヤスクニ通信」は、1960年代の発刊以来現在まで発行されてきましたが、当委員会にも神学校の図書館にも収録されていないものが多数あることが判明しました。現在、欠号となっているのは、1~168、170~193、195、197、201、205、207~451、454~456、516~534、536、549、576、の各号です。過去には靖国神社問題ニュース、ヤスクニ・ニュースという名前にもなっていました。お持ちの方がおられたら複写を望んでおりますので、委員会までご連絡下さるようお願いします。

753号ヤスクニ通信 2017年10月8日 発行 日本キリスト教会 靖国神社問題特別委員会 発行人 井上豊 編集 川越弘 発行 桑広国(大和教会) 〒242-0021 神奈川県大和市 7-1-22 TEL&FAX 046-261-3957
